

保育者養成校におけるピアノ指導

導入から前期試験までの指導過程

Piano instruction in the childminder training school

Instruction processes from introduction to a first half year examination

林 麻由美 (彰栄保育福祉専門学校)

Mayumi HAYASHI

(要旨)

保育者養成校では、短期間に保育現場に必要なピアノ技術を身につけなければならない。入学当初、多くのピアノ初心者学生が抱く“ピアノは困難、負担であると”というイメージを取り除き、ピアノという新しい学びとの良い出会いを提供できるようなピアノ指導について、1年生の前期授業における導入期から前期試験までの授業の実践を報告する。

(キーワード)

保育者養成校、ピアノ指導、導入期、初心者、ピアノ演奏

はじめに

入学者の約8割がピアノ初心者である筆者が勤務する保育者養成校の音楽指導は、1年半と限られた時間内で、保育現場に必要なピアノ演奏技術や子どもの歌の弾き歌い技術、音楽の基礎知識が身につけられるよう、効率よく行わなければならない。筆者は勤務歴20年になるが、当初に比べると、近年は学生の学習能力が低下しており、学習意欲も様々である。そこで思春期という難しい年頃の学生達に、こちらもうまく対応して、お互いが気持ちよくコミュニケーションをとりながら授業が展開できればと考えている。

ピアノの学習は日々の繰り返し訓練が必要である。したがって教員は学生達になるべく早い時期に練習の習慣を身につけさせることが必要であり、その練習方法を具体的に明確に指示することが必要である。よって、1年生の前期授業の展開の仕方が非常に重

要になってくるといえる。

本稿は、多くの学生に見られる入学当初のピアノに対する不安感や苦手意識を理解し、授業の中で適切な課題を与えていくという緊張感を持ちながらも時にはリラックスできるような話題提供や楽しみながら行えるグループワークなどを取り入れ、学生達にピアノが困難だ、負担だと感じさせないような、導入期から前期実技試験までの指導法の実践報告である。

1. カリキュラムの概要

筆者が勤務する専門学校保育科での音楽教育は次の4種類である。

音楽表現 I A	楽典クラス授業(1年前期)
音楽表現 I B	声楽クラス授業(1年後期)
音楽表現 II	ピアノ個人指導(1年通年)
音楽表現 III	ピアノ個人指導(2年前期)

音楽表現Ⅲは選択科目であるが、1年時に音楽表現Ⅱを合格した学生は全員履修する。

音楽表現ⅠAでは、専任教員による楽典指導とともに、2013年より、前期授業内で4回の弾き歌いの発表会を実施している。授業内の筆記だけでは、たとえテストで良い点数がとれていても実技に活かされていない事が多いとのことで、このクラス授業において、内容の改革が行われた。よって学生は1年生当初から簡単な弾き歌いに触れることになる。以下は発表会の課題曲の一例である。

*第1回発表会課題曲(1曲選択して発表する)

- a.むすんでひらいて(右手+うた) 必須課題
- b.おかたづけ(右手+うた) 必須課題
- c.ちょうちょ(両手+うた)
- d.チューリップ(両手+うた)
- e.ぶんぶんぶん(両手+うた)

学生はa.bの必須課題曲をまず始めに練習し、担当教員(ピアノ個人指導)が確認を行った上で、c.d.e(難易度の違う2種類の譜面が用意される)の曲へ進み、1曲を選択し発表する。音楽表現Ⅱ(ピアノ個人指導)では主にバイエル教材を使用するので、内容が少し固くなりがちであるが、このように始めから親しみのある子どもの歌に触れること、また人前で発表するという近い目標ができるので、学生達はよりピアノの練習が前向きなる。また、発表会の回数を重ねるごとに、ピアノ上級者が力を発揮できるレベルの譜面も用意されている。

さらに、第1回発表会で必須課題であった「むすんでひらいて」「おかたづけ」に加え、「おはよう」「おかえりのうた」「おべんとう」が第2回～第4回の必須課題として提示される。この5曲、いわゆる『生活の歌』は、今後学生達が暗譜弾き歌いができるまで、無理なく繰り返し学習することになり、後期の重要な試験課題の一部となる。

音楽表現ⅠBの授業は、声楽科出身の教員により実施される。子どもの歌や幼児讃美歌(本校の建学の精神はキリスト教にもとづく)を数多く取り上げ、学生達の歌唱力の向上を目指し、またレパートリー

が広げられるように実践されている。音楽表現Ⅱ(ピアノ実技)との連携も取られている。

音楽表現Ⅱ、Ⅲは筆者が担当している授業で、90分の授業時間で、5～6人のピアノ個人指導である。その指導目標は明確に提示され、教員間の共通の意識のもとに授業が行われる。

指導目標

- 保育現場で使える曲を1曲でも多く弾けるように指導すると同時に、努力する習慣、練習の方法を身につけさせる。
- 実習での実技がこなせるよう、また就職試験を受けられるような状態まで指導する。
- 「保育者を養成している」ことを常に念頭におき、保育者として相応しい姿勢を身につけさせる。

音楽表現Ⅱの前期の授業は、バイエル教本の抜粋曲と名曲選で構成された教則本を使用し、ピアノの基礎を指導する。さらに前述した発表会用曲も指導する。前期の試験は教本から1曲、発表会で演奏しなかった弾き歌い1曲の計2曲が課題となる。

後期は子どもの歌伴奏、『生活の歌』の弾き歌い、さらにマーチなどを含む『動きに合わせた曲』が入り、学生は盛りだくさんの課題をこなさなければならない。後期試験は『生活の歌』の暗譜弾き歌い、レベル別に出された5曲の子どもの歌の伴奏の中からそれぞれその場でくじ引きで決定した曲を演奏し、さらにもう1曲『動きに合わせた曲』を演奏するという緊張感ある試験内容となっている。

また、学生達は試験を迎えるにあたって、専任教員より服装や髪の色、つめのチェック、持ち物の確認などの説明を受ける。彼らがいつ現場に出ても恥ずかしくないように手厚い指導がなされている。

2年生の前期のみの開講となる音楽表現Ⅲは子どもの歌弾き歌いとバイエル94番,96番,98番,100番,104番の中から個人のペースで学習し、試験に向けてこの中からバイエル1曲と、子どもの歌の弾き歌い2曲(当日指定された1曲を演奏)、さらに自由

曲1曲の計4曲を準備する。

2. 音楽表現Ⅱにおける導入と試験までの課程

前述したように、音楽表現Ⅱはピアノの個人レッスンである。90分の授業時間で5~6人がグループになっており1人15分ずつ指導を受ける形式になっている。教則本は決まっているが、その進め方や扱う曲目については、各教員に任されている。

筆者は近年、導入期はこのグループ全員で授業を展開するようにしている。上級者がいる場合も第1回目は全員で行う。入学前のアンケートにより、各学生の進度はすでに承知している。学生は専任教員より入学前講座を受講しており、よって第1回目の授業においてはそこで学習した「かえるの合唱」をほとんどの学生が両手で演奏してきた。この曲は右手メロディは大変親しみやすく、左手は四分音符の単音でのみ成り立っているため、導入には取りかかりやすく初心者の学生も前向きに練習に取り組んだ形跡が1人1人の演奏から伺える。

中には器用でない上要領がつかめず、両手演奏は困難だが、片手だけであればと、片手だけ演奏する学生もいるが、それでもピアノに対する心構えをしっかりと持つきっかけとなる。せっかく練習をしたこの曲を弾けているからよろしいと、すぐに終了させてしまうことは残念である。そこで第1回目の授業においてはこの「かえるの合唱」を様々な方向からアプローチする。

(1) 「かえるの合唱」における様々な演習

筆者は3年前より、メトロノームを使用した授業を行っている。まず始めに、担当した全員の学生にメトロノームのアプリを携帯電話に取り込むよう指示している。なぜなら、保育現場における音楽活動で使う曲は、そのほとんどが2拍子系や4拍子系の躍動感のあるスタイルである。メトロノームを用いることにより、その躍動感のあるリズム感を早く習得することが出来る。、即ち拍にきっちり合う演奏を早いうちから目指せるようになるのである。また最初から八分音符の刻みを意識付けるようにしてい

る。八分音符の刻みを聴きながら、八分音符、四分音符、二分音符の3種類の音符の長さが身体で感じられるようになるまで、リズム打ちの練習を何回も繰り返して行う。

次に学生の1人にメトロノームの八分音符の刻みに合わせ、演奏してもらおう。他の学生には、「1拍目」だけたたくように指示する。これは容易である。さらに「2拍目」、「3拍目」、「4拍目」だけをたたくように指示すると、学生は拍子を取りながら手拍子をする。

少し難しい指示を出して、「1拍目のうら拍」だけ「2拍目のうら拍だけ」たたくように指示すると、ここにいたっては、自分で拍子を取ることに加え、メトロノームの八分音符の刻みを良く聴くようになるのである。

さらに難しい指示を出して、「2拍目のあたまと3拍目のうら拍」などコンビネーションも行い、拍に対する意識付けを授業1回目から行う。メロディは「かえるの合唱」を用いる。なじみのあるシンプルなメロディに、メトロノームの刻みに意識を向けながら手拍子するだけでも、立派なアンサンブルであると考えられる。

もう1歩演習を進めて、グループを分けて、AグループとBグループの手拍子する拍を変えて行うこともできる。このような演習で、第1回目の授業の緊張感もほぐれ、グループ内のコミュニケーションも高まる。

リズム演習の次に行うのは、左手の演奏についての指示である。楽譜では四分音符の単音で表記されているが、これを和音に置き換える方法で「かえるの合唱」の左手を和音に換えてバージョンアップした演奏を目指すことが学生達の次の目標となる。

この和音練習は、次なるステップへの達成感が得られるとともに、今後和音を弾くことは必要不可欠であるため、手と耳の感覚で早く習得した方が良いと学生に伝えた。そこで左手の単音を和音に換えて両手練習することが、次の授業までの宿題となる。和音はドミソ、シレソの2種類だけであるため、初

心者の学生も何回か繰り返すことにより身につけられる。

(2) 教則本における選曲について

筆者はピアノ上級者を除く全員に、前期で取り扱うバイエルの課題曲とその学習の順番を決めている。決定された曲数と順番が予め提示されると、学生たちもゴールに向かって取り組みやすいと判断するからである。取り上げる曲目と順番を提示する。

バイエル 12 番,13 番,14 番,15 番,18 番,20 番,21 番
この後は 40 番台へ移る。続いて、

45 番,48 番,50 番,49 番,46 番,52 番,58 番,55 番
この後に 103 番を学習する。

ここまで終了できる事が前期の目標である。時間の余裕があれば、66 番やハ長調の音階を学習する。

この中で、筆者がとくに時間をかけて授業を行う曲が、46 番,48 番,49 番,50 番である。

左手が分散和音になっているが、それを和音にして弾くよう指示して、ドミソ、シレソ、ドファラの指の開きと指使いを早く覚えるように指示する。

ドミソは 1 回目の授業の「かえるの合唱」で学習した同じ和音を 1 オクターブ上で弾くことになることを確認し、分散和音のひとつひとつの音を順番に追わないで、塊として捉えるように説明する。また、ドミソは赤、シレソは青、ドファラは緑と、色分けして塊として認識させる。また機能と声についても感覚的に伝わるように、筆者が弾いてその響きを聴かせたり、青の和音は赤い和音に進みたい、帰りたいような感じがする和音であると説明する。練習方法の手順を提示する。

- i 右手の練習
- ii 左手和音練習
- iii 右手+和音練習
- iv 左手を分散和音で練習
- v 右手+分散和音（楽譜どおり）

この時、必ずメトロノームの八分音符の刻みを聴きながら行う。

52 番,55 番,58 番についても同じ練習方法を取り、ドリル学習のように独学でも進められる。授業内で必ずこの練習課程 i ~ v の確認を行う。また、曲は 1 曲ずつではなく、2~3 曲同時進行するように指示する。この時すべての曲が仕上がってなくても、練習の途中段階でもよいと伝える。

どうしても不器用で曲の進みが悪く練習が思うように行われていないと思われる学生については、それぞれの曲の重要な部分だけを指定して、1 曲にとどまらないように指示する。そこで立ち止まると気持ちも萎えてしまうので、切り替えて途中まで弾いたら次の曲に行くようにする。学生にこのくらいの課題であれば出来るだろう、と思わせることが大事である。学生達にはすでに課題も周知させ、練習方法も提示してあるので、授業までにきちんと準備してあれば、（練習ができていれば）先ほど示した課題曲数は十分に前期で消化できる。

また 1 回のレッスンでこれらのバイエル課題の 2 ~ 3 曲の練習課程 i ~ v を筆者が確認するのに、1 人に対して 15 分も時間がかかることはない。ここに提示したバイエルの十数曲を以上のような演習を行うことにより、ピアノ演奏の基本は充分習得できると考えている。

(3) グループ学習の可能性

では個人レッスン以外の残りの時間をどのように使えばよいか。学生達は遅かれ早かれ、皆同じ曲を学習する。授業中 1 人がピアノを弾いている時、他の学生がその曲を別の方向からのアプローチによって学習できることが考えられる。筆者の行った方法を示す。

*指揮をしながら、曲に合わせて歩く。

*練習課程 ii や iv を弾く学生に対し、そのほかの学生が右手部分を歌う。

*右手を弾く学生に対して左手の 1 拍目の音を歌う。

*それぞれのパートのリズムをたたき、リズムアンサンブルを行う。

このような教員も含めた全員である時間を共有することは、個人レッスン1人15分と区切って、その時間だけ教員より指導を受けるスタイルより、音楽の基礎がより身体に浸透するであろう。また、グループならではのエネルギーが生まれ、そのエネルギーが、学習意欲に繋がる。そしてさらに保育現場においての音楽活動にまでもしれが繋がるであろう。筆者はこのような授業内の雰囲気作りを常に意識している。

(4) 弾き歌いの基本練習について

弾き歌いは保育者養成校で学習する新しい学びの一つである。ピアノ演奏の延長として扱うのではなく、むしろアンサンブルの中の一つとして扱った方がよいと考える。なぜなら、ピアノの右手+左手+うたの3つのパートの調和を聴きながら行うべきものとするからである。恐らく、ピアノの上級者であってもこれまでの経験はピアノの独奏スタイルで学んできた学生がほとんどであろう。

独奏曲であれば多声的なスタイルの曲は別として、右手の旋律をしっかりと出し、対する左手の伴奏をどう調和させるかを聴きながら行うのであるが、アンサンブルの場合はそうでないことがある。右手の旋律より左のバス音をもっと響かせたほうがよいなど、その時の状況で判断しながら作り上げるものである。

したがって、右手、左手、うた、のそれぞれの優先順位や調整がなされていなければ良い弾き歌いにならない。それが出来ていない演奏とは、ただ両手を合わせた演奏に言葉が載っているだけのものにすぎない。そこで、弾き歌いも前述したバイエルの練習と同じような演習が必要であると考え、以下のよう

- i 右手を弾く
- ii 左手を弾く
- iii うただけの練習
- iv 右手+うた
- v 左手+うた
- vi 両手+うた

このような地道な練習を行うと、アンサンブルができる耳を養うことができると考える。これは、筆者が約10年にわたりピアノ連弾、ピアノ二重奏を専門に師事していたその師匠の教えから学び、実践してきた経験から言える。したがって、弾き歌いはピアノ上級者であっても、初心者同様の気持ちで臨む必要があると考える。

(5) 前期試験に向けての取り組み

前期試験曲は教則本の中から1曲、音楽表現1Aの発表会で演奏しなかった子どもの歌の弾き歌い1曲の計2曲が課題である。筆者は教則本については、選択した十数曲のバイエルの曲から選ぶようにしている。試験用に難しい曲は与えない。ただひたすら地道なi~vの練習をメトロノームの刻みを聴きながら行うことを学生に促す。弾き歌いについても余裕をもって演奏できる曲を勧める。

そして試験を間近に控えた学生に、次の3点を注意するよう伝えた。

- ピアノの音をしっかりと音を出す。
- はっきりと歌う。
- 同じ速さで最後まで止まらないで演奏する。

この3点を注意しながら、余裕をもって演奏できるようにするには、その学生にとって少し易しめの曲が良いと考える。大事なことは、鍵盤を押す指の動きを覚えることだけではなく、しっかりと耳を使って聴きながら演奏出来ているかということである。それがアンサンブル力を養うための1歩であると考え

以下は、2016年度担当した学生の前期試験曲である。

Aさん	バイエル 58	かえるの合唱
Bさん	アラベスク	あなたのおなまえは
Cさん	バイエル 66	あなたのおなまえは
Dさん	バイエル 48	ちょうちょ
Eさん	バイエル 58	かえるの合唱
Fさん	バイエル 66	あなたのおなまえは
Gさん	バイエル 103	あなたのおなまえは

Hさん バイエル 77 大きな栗の木の下で
 Iさん バイエル 58 大きな栗の木の下で
 Jさん バイエル 66 かもつれっしゃ
 Kさん バイエル 55 かもつれっしゃ

試験はクラス(約40人)全員の前で行われる公開試験である。所作の手順は、教員の前で学生証を提示し、お辞儀をして学籍番号と氏名を言ってから演奏を始める。演奏終了後もお辞儀をきちんとしてから、自分の席に戻る。当たり前のように感じるが、決して完璧ではないのが現状である。したがって学生達が社会に出て困らないようにするために、試験は教員により厳しい審査がなされる。

3. まとめ

4月は新年度であり、新しい人間関係の始まりである。誰もが期待と不安の両方を抱えてこの新しい環境を迎える。保育者養成校での新しい学びにおいても同様であろう。その中でもピアノ実技は特に困難な科目であると捉えられがちである。しかし、学習したことがはっきりと成果に見える科目であるということは、筆者の経験からも断定できる。その点を最初から学生達が認識できるような授業を展開させなければならない。すなわち、1年生前期の授業展開が大変重要であることは間違いない。

多くの学生が抱く“ピアノは困難、ピアノは負担”であるという概念を少しでもなくすために、筆者は、学生に「私にも出来そう」と感じさせる難易度や分量の課題と、練習の仕方を具体的に提示することが大切であると考え授業を行った。さらには、学生の達成感が得られるように、目標地点を前期の授業の最初に決めた。その結果1年生前期試験では、担当している学生の全員が合格した。

今後の課題としては、グループ学習の内容充実と授業工程の確立である。筆者は最近、音楽教育分野での講習や、ダルクローズメソッド、フォルマシオン・ミュージカルなどの教育法の研修を受講しているが、さらに研鑽を積んで授業内容の充実を図りたい

と考えている。

[参考文献]

- 桐原 明子「保育者養成校におけるピアノ指導のプロセスと課題」
 彰栄保育福祉専門学校研究紀要第29号(2014年)
 諸井サチヨ「保育者養成校での『弾き歌い』指導に関する一考察」
 ～学生のピアノ技能に関する実態調査を中心に～
 淑徳大学短期大学部研究紀要第55号(2016年)
 林 麻由美「保育者養成校におけるリズム指導の実践と考察」
 千葉敬愛短期大学紀要第38号(2016年)